

現在、津山市が所有する田町の武家屋敷旧田淵邸は、もとは、箕作阮甫が医学を学ぶ為に上京する直前、身を寄せた永田敬蔵(号桐隠)の屋敷であった可能性が高い。

永田家は津山藩主森家に仕官して以来、津山松平藩にも仕官したサムライだが、桐隠の祖父の時代から三代にわたって儒臣であり、箕作家と永田家は遠縁にもあたる。この桐隠や、小島清介(号大栄)に幼き日の阮甫は漢学を学んだことが伝えられている。

二年(一八〇二)のころ、直後に阮甫の兄豊順(当時九歳)が家を継いだ。移転先の戸川町では、舟屋虎吉の借家に住んで、その場所がどこの屋敷に身を寄せることになったのかも正確には伝わらないが、『出雲街道第九巻』の記述

随想

箕作阮甫と田町の武家屋敷旧田淵邸(永田邸) (上)

竹内 佑宜

二年後の文化九年(一八二二)二月三日には、阮甫は、母と二人で西新町の生家から、城下の戸川町に移った。その推察される主な理由は、阮甫の就学の利便を考へてのことと、経済負担を少しでも減らす為であったろうと

十七日に、一家は戸川町の借家を明け渡し、母の清子とともに、永田桐隠(当時三十三歳)の屋敷に身を寄せることになった。津山藩『国元日記』に「箕作文甫儀為字問、京のための本格的な学問を積んだのであろう。因みに、桐隠の父有蔵は寛政八年(一七九六)に没し、永田家の当主は敬蔵(桐隠)であった。そして、文化七年(一八一〇)に桐隠は藩において侍講に補せられていた。

平成十二年に津山市教育委員会が発行した『津山城資料編』に収録されている「津山城下町絵図」IIには津山藩士として著名な人物が、貼り付けられて数名載っている。例えば、絵師の狩野如水、兵学

家正木兵馬、儒臣小島清介、そして、問題の永田桐隠の名が、田町の旧田淵邸の場所に見えるのである。それは、この絵図が作られた年代(これらの藩士がそこに居住した年代)はいく頃であ

随想

箕作阮甫と田町の武家屋敷旧田淵邸(永田邸) (下)

竹内 佑宜

享和二年(一八〇二)から、文化十一年(一八一四)前後までのものとして、現存する(一八二二)の田淵邸(旧永田邸)の建物には、洋学の町津山を代表する学者、箕作阮甫に縁を持つ貴重な武家屋敷でもあるといえる。因みにのちの

あろうか。当然ながら、これらの藩士が当主として存在した年月が、この土邸地区が作られた時代である。詳細は省くが、残さ一九二二月二十八日に、この時も母の合わせた結果、これはいた永田桐隠宅へ寄宿



天保四年(一八三三)、永田家が他所に移った嘉永七年(一八五四)後に田淵家が入ったこの古絵図には同地は田淵邸と記載されている。(津山市山下)